

学会ハイライト

第42回日本小児皮膚科学会学術大会を終えて

(平成30年7月14日(土), 15日(日), ホテルメトロポリタン池袋にて)

藤田 英樹

日本大学医学部皮膚科学分野准教授

はじめに

平成30年7月14～15日に、ホテルメトロポリタン池袋にて、日本大学医学部皮膚科学分野の照井正教授を会頭、日本大学医学部小児科学分野の高橋昌里客員教授を副会頭として、第42回日本小児皮膚科学会学術大会を開催させていただきました。私は事務局長を務めさせていただきました。池袋で皮膚科関連の学会が開催されたことは少なくとも近年はほとんどなかったものと思われませんが、都心のターミナル駅の目の前という立地の良さもあってか、2日間の会期中に1000名以上の参加者に全国からお集まりいただき、盛会裡に終了することができました。過去最高の参加者数であったのかっております。

実は、ここまで多数の参加をいただけたとは事前にはまったく想定しておりませんでした。たとえば、ネームカードホルダーの用意が960個であったため、途中で足りなくなり急遽運営スタッフ用のものを参加者に使用していただくという事態が生じ、運営スタッフはかなり焦っておりました。一方、会場はたいへんな熱気に包まれておりました。

本学術大会のコンセプト

今回の学術大会のテーマは「子どもの皮膚フロンタインーDeep Insight in 池袋」でした。「子ども

ものの皮膚」の疾患を診療されている最前線の先生方に満足していただけるよう2つの視点からプログラムを企画いたしました。近年、小児皮膚科領域においても難治性の遺伝性皮膚疾患の病態解明が進んでいますので、その各領域におけるトップランナーの先生方をお招きして、特別講演や教育講演でお話をいただきました。その一方で、皮膚疾患を有する小児を診療する機会のあるすべての先生方の日常診療に直結した内容も充実させました。皮膚感染症、外用療法、アトピー性皮膚炎に関するシンポジウムがその代表です。

特別講演・教育講演

特別講演は東北大学遺伝医療学分野の青木洋子教授に「RASopathies～新しい疾患概念とその病態解明」のタイトルでご講演いただきました。最近では皮膚科医にもなじみ深くなったRAS/RAF/MEK/ERKシグナル伝達経路の生殖細胞レベルでの変異と先天異常の関係につき、理解を深めることができたご講演でした。

教育講演に関しては、今回は8人の先生方からお話をいただきました。内容は、「川崎病の皮膚所見とその臨床的考察」 鮎沢 衛先生(日本大学小児科), 「自己炎症性疾患アップデート」 金澤伸雄先生(和歌山県立医科大学皮膚科), 「表皮水疱症に対する再生医療および遺伝子治療の展望」 玉井克人先生(大阪大学再生誘導医学寄附講座),



図1 シンポジウム5「小児皮膚疾患での外用療法の基本知識を見直す」における討論

「小児の足の皮膚トラブルと必要なフットケア」高山かおる先生(埼玉済生会川口総合病院皮膚科), 「子ども虐待は小児の重大な疾患である～対応における医師の役割～」松田博雄先生(社会福祉法人子どもの虐待防止センター), 「遺伝性角化症：特に先天性魚鱗癬について」池田志孝先生(順天堂大学皮膚科), 「苦悩する小児の円形脱毛症診療」伊藤泰介先生(浜松医科大学皮膚科), 「接触皮膚炎」矢上晶子先生(藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院総合アレルギー科)でした。どの講演も多数の先生方が熱心に聴講されていました。とくに鮎沢衛先生の川崎病に関する講演は、本疾患の最初の発見者として著名な川崎富作先生ご自身が聴講されていたのが印象的でした。

シンポジウム

シンポジウムでは、「紫外線の功罪」, 「小児における皮膚GVHDとPhototherapy：最近の知見と治療の進歩」, 「小児の皮膚感染症」, 「小児のアトピー性皮膚炎：病態から予防・治療を考える」, 「小児皮膚疾患での外用療法の基本知識を見直す」の5つのテーマを取り上げました(図1)。とくに、2日目に行われた、皮膚感染症と外用療法のセッションでは、多数の立ち見が出るほどの盛況ぶりです。非常に熱のこもった討論が行われていましたが、とくに立ち見となってしまった先生方にはたいへんご不便をおかけいたしました。また、GVHDと光



図2 懇親会会場

線療法に関するセッションでは血液内科、病理、小児科の先生方からもご講演いただき、皮膚科の学会では普段あまり聴く機会のないような内容もあり、特色の出せたシンポジウムとなりました。紫外線やアトピー性皮膚炎に関するトピックも昨年度に続いてシンポジウムとして取り上げ、多数の聴講者がありました。

スポンサードシンポジウム・セミナー

本大会ではスポンサードシンポジウムを1枠、スポンサードセミナーを10枠開催いたしました。内容としては、小児の痤瘡治療、結節性硬化症の新規外用薬、アトピー性皮膚炎の予防、アトピー性皮膚炎の病態から治療まで、アトピー性皮膚炎の基礎と臨床、アトピー性皮膚炎の病態を考えた治療、小児の炎症性疾患、小児の蕁麻疹、痛みの少ない注射針、食物アレルギー、小児の腸内細菌叢でした。小児皮膚科領域では、やはりアトピー性皮膚炎に対する関心が高く、それを反映してアトピー性皮膚炎に関するテーマが多かったのが特徴でした。アトピー性皮膚炎に関してはシンポジウムでも取り上げており、スポンサードセミナーを含めると、大会全体としてはかなり内容が濃かったのではないかと思います。また、小児の痤瘡治療のスポンサードシンポジウムではソウル大学皮膚科教授のDae Hun Suh先生にも海外の現状をご講演いただき、幅広い内容のシンポジウムでした。



図3 学術大会を終えての記念撮影
会頭(前列中央), 副会頭(前列中央から左1人目), 松原知代次年度学術大会会頭(前列中央から右1人目), 大矢幸弘先生(前列中央から右2人目)と学会運営スタッフ

一般演題

一般演題は口演とポスターを合わせて56題の応募をいただきました。しかし、前年度大会と比べると23題も少なく、学会場に閑古鳥が鳴くのではと本気で心配いたしました。しかし、一般演題は幅広い領域にわたり症例報告や研究報告がなされ、内容の濃いものでした。口演およびポスターセッションの座長の先生方の採点をもとにして、最終的に会頭の判断で会長賞1名、優秀演題賞3名の先生方が下記のように選出されました。

会長賞

「色素性乾皮症D群の小児の1例」

橋本真哉先生

(神戸大学医学部皮膚科)

優秀演題賞

「乳児期早期の湿疹と経皮感作について」

田中泰樹先生

(小児科すこやかアレルギークリニック)

「色素失調症の男児例」

木村景子先生

(聖母病院皮膚科)

「Acral self-healing collodion babyの1例」

定平知江子先生

(東京都小児総合医療センター皮膚科)

おわりに

本学術大会では多数の参加者による活発な討論が行われました。このように盛会裡に学術大会を終えることができ、全国各地から参加くださいました先生方、各特別講演・教育講演・シンポジウム・一般演題の演者・オーガナイザー・座長の先生方、日本小児皮膚科学会会長の高森建二先生をはじめとする役員の先生方、日本小児皮膚科学会事務局の方々に深謝申し上げます。